

## 野田光蔵と『満洲植物誌』

郭 秀梅

順天堂大学医学部医史学研究室／北里大学東医研医史学研究室

本学術大会で、これまで旧満洲時代に医業分野で活躍した学者岡西為人・佐藤潤平を紹介した。今回は、同時代に中国東北の薬用植物の調査、および研究に貢献した野田光蔵について報告したい。

野田光蔵(1909～1995)は九州の農村に生まれ、昭和2年に満洲教育専門学校へ入学するため奉天(現在の瀋陽)に渡る。以後の四半世紀、中国東北の植物の踏査・収集・整理に力を尽くし、『満洲植物誌』を著した。この労作は紆余曲折を経て、昭和46年にやっと出版された。終戦後に野田は長春農業大学の助教授として留用され、昭和28年に最後の帰国学者の一人となった。帰国後は新潟大学教授として勤めて研究を20年間続け、多数の若手研究者を養成している。

野田は教育専門学校で大賀一郎教授に師事し、植物の研究に志す。また満洲博物同好会を発足させ、最初の博物学会誌を刊行した。昭和9年～12年に一旦、北海道大学に進学し、学業の余暇に大学図書館で植物の関係資料文献を閲覧・抄録し、後年の満洲植物研究の基礎を定めた。昭和12年再び満洲へ戻り、公主嶺農業学校に就職し、生物学と薬用植物学の授業を担当しながら、調査・研究を進める。以後の3年間に、前人未踏の蒙古へ植物調査や満洲アルカリ地帯調査・東満森林地帯採集に参加し、東北各地および中朝・中ロ辺境まで踏破し、大量の植物を収集した。昭和15年から新京(長春)第二中学校に勤めた期間には、植物学処女地で薬草資源の宝庫・小興安嶺に初めて足を向け、薬草資源コケモモや麻黄などを発現した。昭和18年に学術研究のため北海道大学へ留学し、満洲・朝鮮などの植物研究をまとめることに専念し、『満洲植物誌』の原稿を完成させる。しかし日本で印刷は不可能のため、満洲へ持ち帰った。

のち『満洲植物誌』は満洲国大陸科学院の研究業績として、新京三省堂からの出版が決まった。しかし昭和20年の終戦直前、政局混乱の中で印刷中の原稿が散佚してしまう。昭和21年、野田は国立長春大学農学院副教授に留用された。当時の長春は中国内戦の最後の攻防地で、銃声がたえず、戦火がおさまらない。しかも物価は暴騰し、餓死者が至る所にいる。このような生活苦の中、野田はかけがえのない原稿の復原を決意し、手元に残った資料や標本を再び整理しはじめた。毎晩、豆油灯の下で満洲植物の蠟葉標本を一枚一枚描きあげ、原稿を書き直したのである。そして満洲植物のほぼすべてを含む134科・約2,000種の標本が、解説と写生図の原稿になった。中華人民共和国成立後、東北農学院に留まった野田は、さらに『満洲植物誌』の原稿を補充して完成させた。計3,000種で図版237枚(約2,000図)からの大作である。ところが昭和28年に帰国のため瀋陽を通過時、没収されてしまった。その後、野田光蔵は諦めずに中国へ嘆願書を出し、日本赤十字会にも依頼して努力した。

そして昭和30年12月8日、中国科学院院長・國務院副総理の郭沫若が来日の際、大きな紙包みを渡され、『満洲植物誌』の原稿が還ってきた。さらに15年を費やした昭和46年、1,655頁の『中国東北区(満洲)の植物誌』が出版される。本書のあとがきには、「かくて満洲植物誌は、第二次世界大戦や中国の内戦、新中国の誕生と幾多の困難をくぐりぬけ、多く人たちの協力と援助により、刊行されたものであり、私の生涯のすべてとも言えるものである」と書かれている。引き揚げてきた学者の多くは、様々な理由があって再びかつての地を踏むことがない。しかし野田光蔵は長年にわたり中日友好交流のために活躍し続け、一方で彼の業績は中国に認められた。1982年に黒龍江省自然研究所の要請を受け、講演を行ったのである。現在、東北農業大学植物標本館・東北師範大学植物標本室では、彼の作製した標本を陳列して植物学者・野田光蔵等採集と明記し、ほかの研究成果も利用されている。